
さがしもの。

李乃 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さがしもの。

【Nコード】

N8228R

【作者名】

李乃 楓

【あらすじ】

神出鬼没、謎の多い少女。そんな彼女に、何故かひいきにされているオレ。彼女に執着する友人。

数年前、彼女に下された残酷な運命とは？

彼女の“探し物”を巡って、とんでもない事件に巻き込まれていく……。
ちよっぴりゾツとして、最後には温かい、そんなミステリアスな物語。

(更新不定期です；；；)

第一話 なぞのしょうじょ。

目の前に現れたのは、神と悪魔。

心の底から溢れるものは、この上ない希望。

そして、課された義務は、果てしない絶望だった……。

「嘘だ、絶対嘘」

何を言い出すかと思えば……またその話か。

「何言ってるんだよ！ 本当だって！ あの、美しくて崇高な」

「わかった、わかったから」

「わかってるのか？ 本当にい〜？」

休憩時間の教室はいつも騒がしいけど、この高倉平次というヤツの声はとにかくデカい。他学年の噂によると、我が校で最も端にある第二校舎の屋上から、この対にある体育館の倉庫まで声が届くというデタラメなものが出回っている。本人に聞いただと、

「オレは何だってできる。そう、声ならな！」

と言つて、天へと目を泳がせていたので、もうその噂は信じない。それでも声がデカいことに変わりはなく、教室の四方八方から視線を感じて、オレは制止に入った。

「頼むから、黙っててくれ」

「おい篠原。オレの口を塞ごうなんて百万年はえーよ」

「そのセリフ、何回も聞いた。おまけに飽きた」

「……ひでーな、ほんと」

「ひどくない」

「だって、この前の話も信じてくれなかったら。可愛くなくない」

「誰が可愛くない、だ！」

まったく……。コイツの体のどこから、あんな馬鹿デカい声が出てくるのだろうか。体は決して大きい方ではなく、太くも細くもなく、至って普通の体つき。

そう言えば、スポーツは得意じゃないと自信ありげに宣言されたこともあるけど、昨年のインターハイで我が校のバスケット部を優勝へ導いた張本人。当時一年ながらにして素早い動きと底なしの体力で強豪を圧倒した……。とバスケット部員が言っているんだから間違いないだろうな。どこが、スポーツは得意じゃない、だ！

加えて言えば……。顔も悪くない。俗の言うイケメンではないけど、体から溢れ出るほどの明るいオーラで、簡単に周りを包み込んでみせる。現にクラスの委員長に抜擢されるほどに頼られている。

誰も非を認めない好青年。

昔から、周りに恵まれた人気者。

なのに、なんで。

いや、あ……だから必然なのか。

「どした？」

クリクリと小動物の目を向けられても、

「いいや、何も」

前から隠していた胸の内を話せないまま、今日も変わらず、

「それより、早く座らないと先生が来るぞ？」

オレは笑ってみせるのだ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、教室内の大体は各部室に流れるようになる。

「今日は部活ないんだ」

「嘘つけ」

「いやいや本当だって」

そう言っつて唇を尖らせる高倉を宥めつつ、教室を後にした。

二年の廊下は活気に溢れている。進学学校であるせいか、春真つ盛りな時期の一年は緊張で身を硬くし、三年は大学受験に向けて武者震いをする。それで二年が際立って活気に満ちているように見える。人で溢れた騒がしい廊下を縫うように歩いて、階段までさしかかった時に高倉が口を開いた。

「ところで！ あの話は信じてくれたかな、篠原正樹くん？」

「なんの話？」

「休み時間に話したろ。あの美しくて崇高な」

「あのっ」

高倉は両腕を大きく天に開いた状態で、オレはそれを呆気に取られる格好で、声のする方へ視線を移した。

もじもじと指を動かす、可愛らしい女子がいた。

茶のبوبヘアーを纏める白いヘアピンがよく映える子で、少し色素の薄い瞳をキラキラと輝かせて、上目づかいでこちらを見てくる。制服のリボンを見るに、彼女は一年生だ。

オレたち二年は青　と言っつても群青に近いのだけど　、三年は緑、そして一年である彼女の色は赤。

「あの、その……、高倉さんに、用があつて……」
言葉を区切るように話す彼女の顔は、どこかしら赤かった。
……なるほどね。

「悪いけど、オレ帰るんだよ。また今度」

「ええ！？」

オレは思わず声を荒らげてしまった。

「えっ、と、その、わかります、けど……」

彼女は今にも泣き出しそうな顔で、何とか高倉を引き止めようとしているのが、見ているこちらにもわかるほどだった。

「だから、その、お時間を作ってほしくて……」

「あんな、高倉。話があるって言ってるんだから、少しくらい聞いてやれよ」

仕方なく弁護に回るオレを、彼女は大きく目を見開いて見つめてくる。

「なんだ、篠原はオレと帰りたくないって言うのか!? オレとは関わりたくないってか!？」

廊下に響く音量に、遠くの生徒までもがこちらを向く。

何だろ、喧嘩か? と囁かれて、体中から汗が吹き出してきた。

ここでイエスと答えるにしても、ノーと答えるにしても、オレのイメージが大幅にダウンすることに変わりはない状況……。

イエスと答えるか!? そんなこととしてみる。彼女は救えるかもしれないけど、友人と帰りたくないと言って、相手を傷つける心の狭い人間だと思われるかもしれない! いや、日頃から高倉の冗談にキツク突っ込む自分が言えることじゃないけど!

じゃあノーと答えるか!? できる訳ないだろ! そんな返答をしたら絶対に、コイツはオレを引きずってでも連れて帰る。女の子が告白をしようと頑張っているのを邪魔して、彼女を泣かせるような血も涙もない人間だと思われるかもしれない! これは確実にありうる!

どうすればいい? どうすれば?

「………つぶ」

高倉が吹いた。

「何がおかしいんだ!」

「くくつ、だつてお前、いつもだったら、さ……、オレはうるさいヤツと関わりうと思わない。……とか言っただけ! あっはっはっはっは!」

オレのモノマネの部分だけ真面目な顔をして声を作り、途端に爆笑が廊下の端まで響きわたった。

はっとして一年の女子を見やると、マズい、本当に泣き出しそう

だ。

羞恥で顔を、耳でさえも真っ赤にし、体全体がカタカタと震えている。まるで壊れたマシンだ。人生最もエンジンがフル活動する局面で、虫が乱入してきた、おまけにその虫が暴れ出した。そして水をぶっかけた。故障するに決まってる！

「笑い事じゃないっ！」

「いやいや、オレはうれいんだって。お前に認めてもらえて」

「認めてないっ！」

「照れんなよ。ほら、みんなも見てるだろ？」

「友情アピールしなくていいから！ というか、こういう時に状況を誤解するのはやめてくれ！ オレ達、見せ物になってるんだっ！」

「えっ……」

小さい呻きを漏らしたのは、あの子だった。

キョロキョロと辺りを見回して、ついに限界を超え……

「しっ……、失礼しましたっ！」

暴走車両のように、急発進していった。

「あっはっはっは！ まさか告白寸前なんて、思ってもみなかった
！」

「前もあつたつて！ 下駄箱で待ち伏せされてて、お前がいきなり『彼女がオレを待ってる！』つて言つて、慌てて走つていった時！ あの後大変だったんだぞ。彼女というのは付き合ってる意味じゃなくて、ただの代名詞だつて訂正したの、誰だと思ってるんだ」

「ああ。あれは別に約束して待ってもらつてた訳じゃなくて、向こうが誤解しただけじゃん。でも、探してもいなかっただよなあ。あの子、気まぐれだし」

「その前も三年の女子に、好きなタイプは？ つて訊かれた時も、お前があまりにも詳しく話すから、好きな子でもいるのかって、お

前が帰った後に泣いてたんだからな！」

「え？ マジ？」

学校からの帰り道。かわいいそんな女の子が姿を消して、オレ達は自転車を漕いでいた。

高倉が部活のない日は、学校を中心に渦巻きを描くルートで帰る。オレはそれに付き合わされてるだけ。そして下校中の生徒に会って、いつもの恋愛トラブルによく巻き込まれてしまう。

高倉平次。実はかなりが付くくらい、よくモテる。

勉強は下の下だけど、スポーツで活躍する勇姿は女子高生のハートをガツチリ捕らえていて、ファンクラブがあるくらいで。

当然、本人は全く知らない。

「オレのファンクラブ？ すごいな！ いつか世界まで広めてやるぜ！」

そんなことを言い出しそうで、あえて教えない。そして、アイツが自分で気づくはずがない。

あるものはいつかバレるのに、全く本人に知られないのは、周りの人間が誰も教えないのも手伝っている。好きな子がファンクラブに入ろうが、追っかけを始めようが、高倉は絶対に女には、たとえマドンナであろうがクレオパトラであろうが靡なみかないと、全校生男子は知っているからだ。現に下駄箱で待ち伏せした子は学校一の可愛い美少女だったし、高倉のタイプを探り出そうとした三年はモデルのような美女だった。しかし靡かないとわかっていても教えないのは、小さな抵抗なのだろう。

それであっても、これは誰も知らないはずだ。

高倉平次は何故、色恋沙汰に鈍感なのか？

……いや、これは正しくない。

何故、美少女にも興味を持たないのか？

前者が正しくないのは、本人を除いてオレしか知らない。
誰も知ってはいけない。そんな気がする。

駅の商店街を抜け、住宅街へ方向を向ける。高倉の近所にさしかかり、ここでお別れだ。

「うう、また今日も会えなかったなあ。抜け駆けするなよ」

「誰が抜け駆けなんて」

高倉は声を張り上げて、目を剥いた。

「するさ！ 彼女を見れば、誰だって！ それに、お前は彼女に認められてるんだから！」

マズいところに触れてしまったと後悔した。

彼女はどうかやら、オレをひいきするらしい。そうは思えないけど、高倉の目にはそう映るようだ。

「何もそうと決まった訳じゃないだろ。心配しすぎじゃないか？
もしかすると、もうこの町にいないかもしれないし」

「いいや。オレの勘は、まだこの近くにいてると言っている」

「……ご都合主義な勘だなあ」

この一言には、ありがたいことに反応しなかった。

また明日と言って、オレはペダルに力を込めた。家の波を抜け、大通りを渡り、しばらく行って橋を渡る。昨日は大雨だったせいで、川は水かさがあり、茶色く濁っていた。

今日は彼女に遭う気がする。

そんな直感があった。

前に遭遇した時も、水かさがあったから。

高倉には悪いけど、言っていない。言ったら必ず、会いに行くと言っ
て聞かないだろう。

アイツとあの子、本当は会ってはいけない。

オレは神社の前で止まり、自転車を降りて、ところどころ塗装が

剥がれた鳥居をくぐった。その先に小さくて古びた社殿がある。鐘は下がっていないけれど、賽銭箱はあって、中を覗くと細かい小銭が数枚あるだけ。

その横に自転車を置いた。

オレはいつもここで手を合わせてから、境内を見回るようにしている。

裏手は雑木林に囲まれている。誰もそこに踏み入るようなマネはしないけど、オレはあえてそうする。

ぱつと見たら生い茂っているように見えるけれど、実は秘密の入り口がある。

社殿の裏側にある、鋭利な刃物で刻まれた“六芒星”の傷を背にして前へ歩き、右を向いて三步進んだ左側にある草をかき分けると一人分の獣道があるのだ。

そこへ足を踏み入れると、すうっと寒くなつて、総身に粟立つ。

少し腰を曲げて道なりに進むと、小さな池が見えてきた。誰にも手を加えられない池の周りには苔がびっしり生えていて、池に向かって立つ数十センチの地蔵もまた然り。水草で多い隠されているために、ここは正に緑一色。

その向こう側に、一人の女子が立っていた。

深緑のブレザーに黒のスカートという、この周辺では見かけない制服を纏う細い身体。すらっと伸びる白魚のような手足。腰まで伸びた綺麗な黒髪。歳はオレより一つか二つ下だろうか。

彼女はこちらを見ずに声をかけてきた。

「また会ったね。正樹くん」

リン、と、鈴が話しかけてきたのかと思った。

「別に遭いたかった訳じゃないけど」

「……………ヒドいこと言うね。いつもだけど」

彼女の言う通りだ。これも高倉には黙っている。本当は、彼女に会おうと思えばいつでも会える。神出鬼没だけど、ここに来ればいる。オレは何度も、ここで彼女と話をした。たわいないことばかり

だけれど。

「今日も探し物？」

「うん。まだ、見つからなくて」

「いつも訊いてるけど、何を探してる？」

「……………今日は帰った方がいいよ。暗くなってきた」

「……………その眼と関係あるのか？」

「……………」

彼女は口を紡ぎ、ゆっくりと振り向いてオレを見た。

「……………どうだろうね」

そう言っただけで彼女は、可愛らしくて、清楚で、美しかった。

顔かたちが全て完璧で、美しすぎるのを除けば、どこにも違和感はない。

肌も、髪も、鼻も、口も、右目も。全てに申し分ない。

……………左目に光る緋色を除いて。

「……………もう帰る。あまりそこらを彷徨つらつかないでくれよな」

「わたしが不気味だから？」

凶星を指されて、背中に冷気が走った。思考が一掃されて思わず、

そっだ、と言いつつになつて飲み込んだ。

本人の前で気が引けたのかもしれない。

「……………噂になるから。女の子が一人で彷徨つらつしてるなんて、

今の世の中じゃ何が起こるか分からないだろ」

「優しいね」

「優しくない」

「そうかもしれないね」

一瞬本心を見透かされた気がして、どっと汗が噴き出した。

ここから早く出ないと！ 逃げないっ！

「じゃあな」

「……………うん。またね」

少し寂しそうな声で応え、彼女は手を振った。

「また会いに来てくれるよね？」

「さあ」

「そう言って、今日も来てくれたよ？ ずいぶん前だけど」

「……明日からテストなんだ」

そう、と呟いたのを尻目に、その場を後にした。

すっかり日の暮れた町を滑走するのは、汗ばんだ身体には心地よかつた。頭皮にも風がすり抜けて乾かされていく。

そして、思い返したくもないものが頭をよぎる。

高倉にはああ言っておきながら……

……オレも人のことが言えないな。

遭いたくない。そう思っただけでも、一人でこそそそと会いに行ってしまう。

彼女には、何か不可思議な、引き込むようなオーラがある。高倉、そしてオレも、それに感化されている。

「ただの恋愛感情じゃない。“何か”を感じるんだ。恋愛なんて甘ったれた心理じゃなくて。それ以上の、本能から焦がれてるんだ。だからオレを止めないでくれ」

初めて彼女と遭った日、高倉と別れ際の一言を思い出した。

あの子は危険だと言うオレの忠告を無視し、今でも探し求め続けている。一途、といえば聞こえはいいんだろうけれど。

だったらオレは、何の本心に突き動かされているのだろうか？

それはともかく、あれからちょうど一年。今はもう高倉を無理に止めはしない。彼女の存在を否定しないようにもしている。だからアイツは毎日のように彼女の話をする。そのために周りからは、高倉の親友はオレだと思われる。

もったいないと思う。彼女以外の話は面白いものばかりだという

のに、クラスメイトとも雑談しているとこを見たことがない。

彼女を誰にも知られたくないから、都合よくあの場にいたオレと行動を共にしているだけだから、他の人間と関わらない。関わる義理もない。それだけかもしれないけれど。

日に日に彼女を求める想いは強くなり、会うたびにいつも「昨日あの子の後ろ姿を見かけたけど、見失ったんだ。惜しい！」とか「あの子に声をかけたら、驚いた顔して逃げてったんだ」「この一週間、会えないままだ……」と聞かされる、そんな毎日。

「あの子が、オレに向かって手を振ってくれたんだ！」

「あつ」

今日聞いた、授業の合間に高倉が嬉しそうに話していた、あの言葉。

真相はどうだったのか、あの子に訊ねるのを忘れてた。

あの時は不意に、嘘だ、と言ってしまったけど、本当だったのだろうか？

ぐるぐると渦を巻くように深まる謎が、オレの中を占めていく。

彼女は何者？ どの生徒？ 何故、いつもあの場所にいる？ 何を探してる？ そもそも名前は？ どうして、今までオレ以外の人間と話をしなかった？ どうして、今回に限って高倉に手を振った？

本当に何気ない話しかしないものだから、彼女の素性は何も知らない。

不覚だった……。彼女はオレの名前を知っている。初めて会った時に、高倉がベラベラと喋ったんだっ！

彼女とこの日まで関わることになるのも、高倉が異常なまでに執着するヤツだと知ったのも、全てはあの日から。

「今は……、まだ思い出したいくない。」

「……」
オレはさらにペダルへ力を入れ、家へと急いだ。

第二話 しんじられるもの。

ああ、どうしよう！

もし“彼”が言っていたことが本当なら、自分はいつか時間の流れに心を蝕まれ、いつしか独りになって、脳も肌も耳も鼻も、この目でさえも、その役割を忘れてしまう！

早くしないと、自分が自分でなくなつて……。

こんなはずじゃなかった！ こんなこと、望んでなんかいなかったのに！

彼女は一体何者なのか。

上辺うわべだけの友人、高倉平次でさえわからない疑問。

あの池には、もう近寄らない方がいいのかもしれない。

教室に向かう足取りは岩を背負っている感覚で、ずしり、ずしりと、日頃より重傷だった。振り向いたら子泣き爺いが……、それならまだいい。もし泣いてるあの子が……。

だから後ろから声をかけられても、せめて今日だけは、あえて何も気付かないフリをすることにした。

「ひでーよ。絶対聞こえてるだろ、馬鹿ヤロー！」

そんな悪態をつかれると、申し訳ないどころか仕方ないと思ってしまうけど、

「悪かつたつて。だからもっと声を小さくしてくれよ」

そこは一応謝っておく。

「どーした？ 悩みか？ お悩み相談室が必要か？ よし、オレが聞いてやるよ！ さあ、どんと来い！」

「ちよつと疲れただけ。大したことじゃないから、気にしなくていい」

あまり心配かけさせるのもどうかと思って、掌を向けて言った。

「ふうん。．．．．あまり疲れ溜めるなよ」

高倉は、静まった声で、そう言った。

そういえば、テストもないから遊びに行きたい放題だった。

休み時間になると、クラスの連中はどこに遊びに行くか意見しあっていて、オレはそんな彼らが羨ましかった。

いい意味ではなく、少しひねくれた感情を持って。

カラオケに行こうと話している女子には、あんな馬鹿らしくなるようなお金を払ってまで行く意味があるのか訊ねてみたくなつたし、彼女とデートに行くと呼んでいる男子には、嫉妬を買うぞと助言してやりたい。それでも何もせずに見ているだけなのは、ただ面倒なだけだからなだけど．．．．頭の隅の方では幸せな彼らに嫉妬している自分がいて、それを認めたくないのかもしれない。

悩みとか、恐怖とか、そんな類たぐいのものがないのかなと、群れる社会の中で思ったりしていた。

「オレ達も、遊びに行こー！」

だからオレの席に来るなり、高倉は調子よく言ったものだから、つい呆れてしまう。

「お前も元気だなあ」

爺臭いこと言うなよと膨れて、高倉は次々とプランを立てていくでも、相手が思いついたように口からこぼれる言葉に興味はなかった。それ以前に、遊ぶ気さえも更々なく、ましてや外に出る意欲でさえも毛頭なかった。いろいろ提案してもらうのも悪いと思いつつ、何かといちゃもんをつけた。

「そうだ！ じゃあさ」

すると途端に目を輝かせた。

「あの子”を探しに行こう!”

オレは悪寒が抑えきれなかった。

「あの子、って、あの彼女のこと、か？」

「もちろん!”

「でも”

キュインキュインキュインキュインキュイン !

駄目だ! 絶対駄目だ!

オレの中で、全身全霊で警報を鳴らしている。

「お前なら、一緒に探してくれるだろ?’

断りきれなかった。

彼女に遭いたくないのに、今回のプランを拒絶できなかった。

きつと、拡声器を通した声にやられてしまったんだ。

あれは洗脳のようなもので。

彼女あつてこそこの今だと思い知らされて !

聞きたくもないのに、耳を塞いでもガンガン響く音に対抗できず、
呆然となつたまま承諾してしまった……。

今週の土曜日、午後一時から。例のあの子を探して町を探検する。
小学生が授業で行う『ぼくたち・わたしたちのまちツアー』なら、
気分はもつと違うんだろうなあ。

“^{ほか}会”いたくない。“遭”いたくもないし、“逢”うなんて以て
の外だ。オレはあの子が不気味で仕方がない。けど、高倉の場合は
“逢”いたいとなるのは今までの経験でわかりきったことだった。
アイツは小学生のつもりで今回の計画を練っている。

オレ達はまるで違った。向こうは胸の高鳴りが止まらないのに、
こちらは心臓を握られて息が詰まる。彼女が呪いに来るのではない
かと、每晚布団の中で体を丸め、時々目が覚めては布団から部屋を

垣間見る。そんな身を削られる日々が過ぎた。

できれば土曜日を通り越してほしかったんだけど、世の中は個人的な事情で成り立っていないのが恨めしい。

「おはよう！ 遅刻なんて珍しいな？ ……よし、まずはあつちを探してみるかつ」

恨んでも恨んでも日常は変わらないから、ただ早く今日が無事に終わるのを祈るばかりで、心の奥底で叫び続けていた。

この町は大都会でもなければド田舎でもない。平たい丘と細い川のある、少し老舗が残る風情溢れる所だ。毎年の夏に花火大会があることで有名、その時期になると様々な人で町全体が溺れそうになる。……と簡単に説明すれば楽だけれど、言わせてもらえば不便極まりない。ゲーセンなんて一つ前のプリクラと誰が喜ぶのか理解に苦しむぬいぐるみが積まれたUFOキャッチャーがある程度で、カラオケはあるものの、遊びに金を使うお年頃の欲を満たすものはごく少数。そんな人間は駅から一駅の、ここよりまともな街へ遊びに出かける。その為に静かで過ごしやすい町になって、住人は多い方だ。だからオレの通う高校は一学年に七クラス、進学校としてやっていけるんだと思う。

静かで暇だけど、遮る物が少なくて落ち着く、そんな所。

そして自転車で、この箱庭を走り回っている。

「前にあの子に逃げられたのが、確かこの先の公園で……、初めて会ったのがそこを右にずーっと行った郵便ポストの前だったよな！」
キリリ、と首を締め付けられる気持ちになった。

ふとあの時の光景が頭をよぎり、彼女の姿がありありと思い出される。

今と変わらぬ容姿端麗、異なるのは精気を感じられない表情。夕日に負けない左目……。

親に頼まれてハガキを出しに来たオレと、その場にたまたま居合わせた高倉は、彼女がポストの中を覗いているのを目撃したのをき

っかけに今の関係へ至る。最も思い出したくもなく、ありがたみもない出会いだ。

「あの時の彼女、綺麗だったよなあ……、夕日を背中に立つ、あの姿……」

「……」

「これがはたして純真なる高校生の言動なのか……。今やってることだってストーカー行為に近いんだぞ。」

「何だよ、その目」

「いいや。お前が何を言おうと、オレの知ったことじゃないと思っただけ」

「ほんつとに毒舌だよな、篠原は」

それから転々と場所を移し、気付けば太陽は西へ沈みかけていた。オレの不安は空振りで済みそうだ。

「今日はここまでにしよう」

「うう、手詰まりか」

高倉は残念さを盛大にアピールして頭を掻いた。

「今日は諦めて帰ろう」

これ以上付き合わされるのも御免だ。コイツを説得して、せめてオレだけでも帰らないと、と頭の奥底でそんな風に考えていた。

高倉は、うーんと唸ってから夕日を見た。

「……いや、やっぱオレはまだ探すわ。用事があるなら先に帰ってくれてもいいけど」

嵐の前触れだろうか、とにかくオレを無理に引きずる気はないらしい。用事はないけれど帰らせてもらおう。

「それじゃ、先に帰る」

「おう、ありがとな」

自転車に跨り、ペダルを足にかけた時。

ふと疑問に思った。

どうしてそこまでして彼女に会いたいのか、と。

日頃から思っていたことかもしれない。けど高倉が『何かを感じ

る』からと言っていたから追求しなかっただけで、本心では何をしたいのか、オレは考えもしていなかった。

「なあ」

オレが振り返ると、怪訝な様子でこちらを見てくる。

これくらい訊いたって構わないだろう。

「彼女に会って、何がしたいんだよ？」

すると呆気に取られた顔をした。

「何でだろーな？」

それはこっちの台詞だ。

「理由もなくストーリーカーしてるのか？」

「ストーリーカーなんか！」

心外！ とでも言いたげに、眉を八の字にしてみせた。

「そりゃ綺麗だし？ 話したいってのもあるし、あの子が何者なの

か知りたいだけだ、うん！」

「それって」

好き、ってことじゃないのか？

「前も言っただろ？ 一目惚れとか恋に落ちたとか、そんなのじゃ

なくて。もっとこう“繋がり”みたいなのを感じるんだよ」

そう言われると、恋愛の類ではないんだなと思ひ直した。

「“繋がり”って？」

「それは……わかんねえけど」

「じゃあ結局、何もわからないままストーリーカー行為してるのか」

「だからストーリーカーじゃないって！」

コイツは本当に彼女のことを知らなければ自分の本心もわからず、

挙げ句の果てに行動の区分範囲さえわかっていないのか！

「そういうことにしとくよ」

もう暗いし、無駄話もこれくらいにしておこうと思ひ、別れを告

げて自転車を走らせた。

いつしか日も暮れていた。電灯に明かりが付き始め、家の窓から

光が零れてくる。西はうつすらと赤みを帯びているが藍色と混じるグラデーション、真上を通って対の方は月がぼつりと浮いている。

町が一日を終えようとしていた。

「早く帰るつもりだったのに」

平凡な独り言を呟ける幸せにほくそ笑む。

家はすぐそこだ。角を曲がれば見えてくる所まで来ていた。

スピードを出していないから急にハンドルを切る必要もなく、曲がってすぐのゴミ捨て場を避けなければならないから、軽く右手を引くだけで良かった。

「……っ！」

息が、詰まった。

吸うことも、吐くことも、できなかった。

だって、そこに、家の近くに、何で、知ってる、まさかどうしてそんな、

「あ、正樹、くん……？」

何で、こんな所に、いるんだっ！

急に顔が火照ってきた。

なのに手足の先が凍っていて、動かない！

冷や汗が額に浮かび、頬を伝っていくのが冷たいっ。

曲がった所にちょうど鉢合わせるなんてっ！

いや！

違う！

彼女は！

待ってたんだっ！

オレの帰りをっ！

「塾、行ってるの？ テスト期間中に、出かけるなんて」

塾じゃないけどっ。

あれは嘘だ！

テストなんて、ずっと前に終わってるっ！

オレが、嘘をついたの、バレた！？

苦しい、息が、できない！

「それにしても、奇遇だね。……こんな、所で」

違う！

偶然なんかじゃないだろっ！

お前は！

『どうして嘘をついたの？』って！

言いに！

だからつけてきたのか見ていたのか待っていたのかオレが何をしているのか、

ずっと！

見られていたのかオレはっ！？

「……どうしたの？ 何だか、顔色が……」

「べ、っに」

「嘘。絶対、変。何かあったの……？」

頭の言葉に意識が失せかけた。

「何でもない」

「……帰れない」

「何でっ」

心臓がうるさい！ 黙れ！ 吐き気がする！

「……話を、き、いて、くれる……っ？ 正樹く」

「悪いけど帰ってくれっ」

「お願い、正樹くんっ」

「帰れっ！」

とにかくここから逃げたかった。

でもコイツにとって箱庭のどこへっ？

家か？

バレてるのに？

そこしかないだろっ！

オレは揺れる地面に立ち、思いっきり突き飛ばした！

ゴミ袋が彼女を包み込むように窪む。

直後、ガシャアン！ という音に後ろを振り返ると、自転車が倒れて空走りしているのが見えた。

「う……っ」

彼女の口から呻きが漏れた。

突然、血が抜けていく感じがした。

心臓が刻む鼓動は早いのに、ない血を必死に送り出そうとしている。

立っているのも、やっとだった。

それなのに。

「まさ、くん……、お願い、っ聞いて、っう、わたし、話……」

立ち上がるでもなく。

声を震わせて。

整っているはずの顔をぐしゃぐしゃにして。

右目から大粒の涙を零して。

お願い、お願い、と繰り返す彼女がそこにいたものだから、膝の

力が抜けた。

そして突き飛ばした時の、彼女の肩にある熱がようやく手を伝ってきて、大きく息を吐いた。

最後の汗が流れ落ちる。

「……悪い」

これでは目覚めが悪いから手を差し出した。

畏かもしれない。そう頭をよぎったけど、通り過ぎていった。

彼女は無言でオレの手を取る。勢いをつけて、ゆっくりと引き上げてやった。

彼女がいなくなった窪みには大きな突起物が見えた。よく見るとコンクリートのブロックが数個積まれているのが、暗がりでも異質さが際立っていた。

ここは燃えるゴミしか捨ててはならない所なのに……。

「ごめん」

「……いいよ。わたし、不気味だもんね」

そうじゃない、と言えなかった。オレに言う資格がなかった。

そっと手を放すと、冷たい空気が通った気がした。それほどまでに彼女の手は温かくて、柔らかかったんだ。

彼女の片目だけの涙は堰を切って流れたままで、オレはどうしていいかわからない。

彼女は小さく鼻をすすると、じっとオレの目を見て、途切れ途切れに言葉を紡いだ。

訴えるように。願うように。

「正樹くん、話が……あるの。私にとって、大切な、話。正樹くんだから、お願いしたいの。わたし、嫌われてるのわかってる。……けど、もう、時間が……っ、お願い、正樹くん。これからするわたしの話を、絶対に嘘だと思わないで。助けて、正樹くん……っ」

オレは彼女の願いを聞いてやることにした。

別に、何度も名前を呼ばれて使命感に駆られたからじゃない。

ただ、彼女の涙を信じてみたくなっただ。

黒い瞳から流れる、その涙を。

血で染めた緋色はまだ怖いけれど……それでも話くらいは聞いてやりたかった。

家上げる訳にもいかず、携帯のメール画面に短い文を打ち込んで、母さんに送った。

『帰り遅くなるけど、心配しなくていいから』

第三話 つそとほんと。

自分がどれだけ嫌われてるかってわかってるけど、それでも君に助けてもらいたいのには正直おこがましいと思う。

だから君が手を差し伸べてくれた時はびっくりした。

うん。そうだね、話さないといけないね。

今の段階では全部話すことはできないけど、少しだけなら“神様”も目を瞑ってくれるよね？

君はどこまで信じてくれるのかな？　こんな醜いわたしを……

この子はオレの家を知らなかったようだ。この周辺で探し物をしていて、あの角で偶然オレと出くわしたらしい。

彼女は泣くのを堪えて説明できなかったのを詫びた。

謝るのはオレの方だ……。

突き飛ばした件も含めて詫びると、大丈夫だよと小さく手を振って額を汗ばませていた。

家から湿布を取ってくると言ったけど、彼女はそれを拒んだ。用が済んだらすぐに帰ると言っていて聞かず、落ち着ける場所はないかと催促してきた。

近所の小さな公園に案内して、オレはズボンのポケットに入れていた小銭を自動販売機に入れる。昼間に使うはずがとんだ誤算いや、頭のどこかでわかってたけど、高倉に連れ回されて休憩

の余地もなかったものだから十分に残っていた。チャラチャラと流れ響き、ボタンにライトが点灯する。

彼女は小さく何かを呟くと、隅にあるベンチに向かった。聞き取れなくて訊ねようと思ったけど、水でもコーヒードもないと予測して、あえて何も言わなかった。こんな場所に大した自動販売機など置いていない。種類も限られている。彼女はおそらく『いらぬ』と一言だけ呟いたのだろう。

オレは低糖のコーヒーを買い、お釣りをポケットに突っ込んで彼女の元へ歩み寄った。

こんなに近づいたの、初めてだ。

思い返しても今日ほど近寄ったのはなかった。初対面は会話はそのものの遠目だったし、いつも池を挟んでいたから、彼女がまさか温かい絹の肌だとは夢にも思わなかった。

地面を見つめる彼女を見つめる。

彼女の左目に宿る夕日が、電灯の明かりで冷たく光っていた。

彼女が開けていた隣に腰を下ろす。

「それで、話して？」

「……手伝いを、してほしいの」

「手伝いつて？」

「探しもの」

彼女が“何か”を探しているのは知っていた。

「何を？ どこにある？」

「何かは言えない。どこにあるのかは、わからない」

拍子抜けを通り越して呆れた。

「それだけの説明で手伝えって、無理。何を探せばいいのか教えられない、おまけに目星もついていないなんて、オレをナメるのもいい加減にしろよ」

言い切って、しまった、と後悔した。彼女は腫れた目を白魚の指先でこすり、大きく深い深呼吸を始めた。

それを数回繰り返し、はたとオレの目を見た。心をも見透かす気

迫で彼女は、

「わたしがこれから言うことを、正樹くんはどこまで信じてくれる？」

と、静寂な公園に鈴を転がした。

しばらく啞然として、やっとの思いで言葉に乗せた。

「どこまで、と言われても、聞いてから考えることにする」

黒い瞳が、揺らいだように見えた。

「わたしが話すこと、誰にも言わないって約束してくれる？」

「嘘つきなオレと？ やめた方がいい」

「嘘つき……」

彼女は小首をかしげた。

「テスト」

「えっ？」

「ずっと前に終わってる。この先も夏の始めくらいまでない」

「そう、なんだ……」

彼女は視線を外して、物思いに耽る表情を見せた。こうしていると普通の子だな、と思う。

それでもやはり、緋色の目は微動だにしなかった。

「それくらいの嘘なら別に構わないよ。ただ、今わたしが正樹くん
に守ってほしいことを約束してくれるかどうか、それだけでいい」
なるほど。

「一つ聞きたい。どこまで話せる？」

「……目星はついてない訳じゃないことと、どうして探しているのか、あと……この左目のことも」

左目……。

「わかった、約束する。だけど信じるかどうかは聞いてから決める
彼女は、うん、と頷いて、足の先を見つめた。

「……わたしの探しているのもはね、多分、この近くにあるはず」

「多分？」

「わからないけど、直感的な？ 胸騒ぎのようなものがあって、この町の近くにある気がする。ここかもしれないし、隣町かもしれないし、もしかしたら全く違う所かもしれない」

「随分と曖昧な勘だな」

「誰かさんとは真逆だ。」

「結構探したんだよ。西の方からずーっとずっと。何年かかっただろっ」

言い終えて彼女は、しまった、という顔をして口を押さえた。オレには方角がマズかったのか年月がマズかったのか、まるで検討もつかないが。

「で、なんで探してる訳？」

「……わたしが目、見て」

「見て……って、さっきから見てるけど」

「もつとよく見てっつてこと。ほら、わたしの左目に六芒星が描かれてるの見える？」

白魚が緋色を示す。が、色は認識できてもよくは見えない。

「近づいても大丈夫？」

「うん」

彼女の顔に十数センチまで近づいた。誰が見ても確実に誤解される距離だった。もし高倉が見ていたら……何をされるかたまったものじゃない。

目の前の彼女はどこか不審で、視線がうようよと泳ぎ回っていたものだから、動くから見えないと咎めるとようやく止まった。

言われた通り、緋色の瞳に黒い六芒星が刻まれていた。じっと見ていると、鋭い瞳孔がオレを裂いてきそうで身が凍る。

もういいかと言われて顔を離れた。

「わたしの探してるものは、すっごく大切なもので。それとこれを交換したんだよ」

一息置いて、彼女は言う。

「この目と、わたしの本当の目と」

本当の？

急に首を締め付けられるような感覚に苦しくなった。世界が逆さまを向いたか、地球が逆回転し始めたのか、オレにはまだ理解できない。

わずかな隙間から空気を抜いた瞬間、オレは少し違和感があることに気付いた。

「ちよつと待て、移植の間違いだろ」

「移植じゃない。ちゃんと交換したよ。条件付きでね」

条件つてなんだ？

そもそも彼女が何を言ってるのかわからない。予想の範疇を優に超えている。もったいぶる言動に苛立ちが募る気もしない訳ではなかった。

彼女は声色を落とす。

「わたしの右目を渡す代わりに貰った。もし自分の目を見つけれたら返すって……。それまではこれで我慢しろってね、そう言われた」

新しい悪徳商法か、あるいは非現実世界が実在したとかいう考えが浮かんだけれど、すぐに弾けて消える。オレはそこまでメルヘンチックじゃないからな。

「はいそうですね。渡せるものじゃないだろ……目だぞ、目！」

「わからないよ、どうやって渡したかなんて！ 誰かも覚えてないし、気がついたらこうだったんだから！」

弱々しかった彼女が急に声を張り上げた。その響きは暗がりへ徐々に溶け込んでいった。彼女の声を包み、再び静寂の世界に変換される。

闇はありがたい。

ここに一つの空間を造りだし、いわばオレと彼女を一般世界から隔絶した空間で、それでいてかつ彼女の叫び声から想定される顔がありありと見なくて済むから……。

こうして彼女の弱みから逃げる事ができた。卑怯で卑劣な自嘲を押し殺しもできた。

すると、別に、と形を整えた彼女の口から漏れる。信じてとは言わないよ、と続く。それきり黙り込んでしまった。

ずっとそうしていた。向こうから話さなければオレも黙ったままで、何も言わないから沈黙していた。

時間もかかっているし、そろそろ帰らないと母さん心配するだろう、と思いつつも彼女を置いて帰らないのは、少しばかりの親切心からかもしれない。

すると、ちょうど彼女が呟いた。

「信じなくていいから」

「………！」

喉をすり潰したような声に正直愕然とした。

恐怖なんてものじゃなかった。

ただ漠然と、心臓をワイヤーで縛られた感覚に襲われた。

それ以下の感情はないことにやっと気付いた。

「もう、会えない」

「………なんで」

「全部話せない。やっぱり無理、だったから」

「なんで」

「だから、無理なんだって」

「なんで」

「パァン。」

一瞬、己の意識が途切れた。

少し間を置いて、やっとの思いで状況を理解する。

オレはひりひりと夜風に障る頬を手で押さえた。

「ひどいよ、正樹くん………」

そう言い残して、彼女は行ってしまった。独りで残されたオレが

絞り出した言葉をせめて聞いてほしかったと思って最後の祭り。彼
女はこの町を出て、もう二度と来ないだろう。

オレは鉛の足を引きずりながら、家に戻ることにした。

第四話 つみわすね。

頼みの綱はなくなつた。

自分で何とかするしかない。

それとも、このまま身も心も朽ち果ててしまえば、この辛い気持ちも消えてなくなるのかな……。

オレは酷い人間だ。

助けを求める彼女を裏切ってしまった。

よりもよつて、あんな形で……。

世界は残酷にも朝を迎えて、支度を迫られる。いつまでも夜が明けないのはオレだけだった。

「正樹」

気付けば制服に身を包み、靴を履いていながら、手に何も持っていないかつた。

「ぼんやりしちゃつて。鞆忘れてどうするの」

「ありがと」

オレは苦勞を刻んだ手から鞆を受け取る。

篠原晶子まゆこ。それが母さんの名前だ。温厚でありながら曲がつたところが嫌いな性格で、近所付き合いはまあ良い方。至つて不自由一つない。ただ、唯一の失は男運のなさ……、夫に逃げられて数年が経つた。

つまり、オレの父親はここにいない。

「そんな風に、た〜りら〜ってしてたら、三輪車にはねられちゃうよ?」

と、両腕をくねくねと波のように泳がせる。

「た〜りら〜、って何それ……」

「擬態語よ、習ったでしょう」

「一般常識から離れた擬態語を習った覚えはないね」

「ひどーい」

「それと三輪車はない。絶対にない」

母さんは目をパチパチさせた。

「そう? だつて車じゃ酷すぎるし、自転車じゃ痛いでしょう?」

「だったら三輪車しかないじゃないの」

「そうじゃなくて!」

無意識に声が大きくなった。

「三輪車に轢かれる高校生はいないから!」

「いるわよ」

母さんは胸を張って鼻息を荒くした。示すように拳を作って張った胸に当てて弾ませてみせる。

「わたし、高校生の時にぼーっとしてて三輪車にはねられちゃったことあるから」

「いたのかよ!」

しかも目の前に!

「馬鹿だよ! 救いようがない!」

「えー、だつてしょうがないじゃない。悩み多き年頃だったんだから。ちよつと考え事してて河川敷をぼんやり歩いてたら、向かってくる三輪車に気付かなくて、ちよつと二歳くらいの子かな。足を轢かれたついでにすねをぶつけられて、それでも気付かずに蹴り飛ばしちやつて。その子、河川敷から転がり落ちちゃつた」

「はあ!?!」

「でも怪我一つなくて良かったわ」

「いやいや良くない! 完全な加害者じゃないか!」

「そうかもね」

くすくすと笑っていた母さんが、ふいに真剣に、でもねと続けた。

「今さっきの正樹の顔、あの頃のわたしにそっくりだったから」

そっくり？

意味がわからない。

オレはそこまで抜けてるように見られていたのか。

………と思った。

「轢かれるならまだしも、気付かないまま足下にあるものを蹴っちゃだめ。子どもでなくても、友達だったり物だったり、大切な人や物を知らないうちに蹴り飛ばしちゃだめ。自分が知らないうちに傷つけちゃったらだめ」

でも、もう大丈夫ね。と言う。

「今の正樹は、さっきより顔色が良くなってるから」

「………」

「いつてらっしやい。大丈夫、今はそんな時期なんだから。悩めよ少年っ！」

肩を掴まれ方向転換、そして軽く背を押された。

「………いつてきます」

玄関を出ると、庭先にいたらしい雀が飛び出していった。澄んだ空気が鼻を通って脳を目覚めさせる。

ここは現実なんだよ、と。

『大切な人や物を知らないうちに蹴り飛ばしちゃだめ。自分が知らないうちに傷つけちゃったらだめ』

母さんは知らないだろうけど、昨日、実際にあったんだよ。オレが何も知らない彼女を、親しんでくれていた彼女を、皮肉に無惨に傷つけてしまったよ。

母さん。他人を傷つけてはならないなんてことは、小学生でもわかるんだ。

ただこれは特別で………、誰にも頼れずに苦しんで、こんなオレに助けを求めてくれた彼女を逆に傷つけたんだよ。

「信じてやれなくて、ごめん」

自転車のスタンドを蹴り上げ、押して前進させる。チェーンの擦れる音が朝の世界に反射して耳に戻ってくる。だというのに、口にした言葉だけ聞こえてこないのはどうしてだろう。吸い込まれて戻ってこないのはなぜだろう。

『ひどいよ、正樹くん……』

この言葉は頭から離れないというのに……。

「ごめん……」

名前も知らないあの子にもう一度呟いて、ようやくペダルを漕いだ。

学校はある意味で便利だ。

ああ世界は何も変わらないんだとわかるから。

無情に、無常に、無責任に。個人を見放して笑い回る世界。その中には必ず、

「やあ篠原正樹くん！ 今日も浮かない顔でグッモーニン！」

日本語の使い方をよくに知りもしないヤツもいるわけで。

「浮かないのが良い朝なのかどっちかにしてくれよ」

「いやいや〜。浮かない朝であろうとも、心地よい一日にしようぞ、ホトトギス」

「頭痛い」

「何だつて！？ 保健室に連れてってやるよ！ さあ乗れ！」

駐輪場でかがんで背中を向け、ほいほいとする高倉は、この時点でかなりの見せ物で、目に入れると痛々しい。誰あの子、ほら二年で有名な……、なんてお馴染みすぎて視界がクラツとする。いじりすぎは悪いな。

「嘘だつて」

「いやいや、もしもつてことがあるだろ！ ここはオレの勇姿を見せつつ友情をアピールする最高のイベント！ ほらほら乗れつて」

一体こいつは人を何だと思ってるんだ！

「漫画の読みすぎだろ！」

「おいしい、水曜日にやってる子ども向けアニメの名シーンだ」

「おしくも何ともない」

くすつ。

高い息が漏れる声があった気がして、後ろを振り返った。

群青のリボンを隠すウェーブのかかった髪のカラスメイトが、顔を背けて笑いを堪える姿がそこにあった。つり目を細めて、少し潤ませてるように見える。確か、同じクラスの中川さん、だった気がする。オレは自分から女子に喋りにいかないし、女子は顔と名前が一致しないのが当たり前のようになっていた。

訝しむオレに気づき、指先で目頭を軽く拭った。

「あ、その、いつも面白いなって思ってた」

「面白い？」

オレは思わず聞き返した。

「みんな変だなって思ってる顔してるから笑い堪えるのに必死だったけど、わたしは面白いと思うよ。特に今日の二人は仲良さそうだから、いいなあって思って」

意外な言葉だった。

謎の彼女によって繋がれた偽りの友情が、周りには単なる仲良しにしか見えていないと思っていたけれど。中川さんの目には何か違うものが映っているような……。

いや、まさかクラスメイトがそんなことに気づくわけないか。

「いいだろ、オレたちの友情は」

高倉に背後からがばつと勢いをつけて肩を組まれ、よろけそうになった。横目を使って顔を窺うと、満足そうな笑みを浮かべていた。「うん。すごくいいと思うよ。ただ」

「ただ？」

復唱したのは高倉の方だった。

「……ううん、つい変に舌が回って、おかしいことを言っちゃっただけ。気にしないで。わたし緊張すると、思ってもないこ

とを言っちゃうんだ」

中川さんは見た目からすると、しっかり者の感じがする。人と話すだけで緊張しそうなほど気が小さい人には到底思えないのだけれど、本人が言うのだからそうなのだろう。人は見かけによらないと言っし。

オレも人見知りか激しいから、中川さんに少しばかりの親しみを覚えた。

そろそろ教室に行かないと、と中川さんは言う。

慌てて駆け出すオレたちに、彼女はこうも言った。

「足下には要注意！」

母親でもないんだから。だけど、似たことを母さんに言われたよ
うな………？

運動部の高倉は先を行き、オレは下駄箱で中川さんを待つてみる
ことにした。小走りで入ってきてオレを確認すると少し驚いた顔を
見せ、次の一步を止めた。

「待つててくれたんだ？ 何だか意外かも」

つり目をさらに細めると瞳が見えなくなるほどだけど、不細工ど
ころか可愛らしさを醸し出す微笑みだった。身長もそれなりの、ほ
っそりした体つきに小さい顔の中川さんは、今にも消えてしまいそ
うな儚さを持ち合わせていて、それが彼女の愛嬌をより素敵なもの
にしていると思わせる。

「篠原くんって、高倉くんと仲良しだよね」

「まあ、うん」

「憧れちゃうなあ」

あれ？

もしかして、中川さんは高倉のファンクラブのメンバーなのか？
いつも側にいるのがオレだから、嫉妬されているのだろうか。

「あいつ無神経なところがあるけど、いいヤツに変わりないから、
これからもよろしくやってくれな」

「え？ あ、うん。よろしく。えっと、その………」

頬を赤くしたり青ざめたりして忙しくさせながら、お辞儀の瞬間に髪が空気中を舞う。

「よろしく、篠原くん。と、いないけど高倉くんも」

なぜだろう。何か違和感があるように感じる。高倉フアンの一員にしてはどこか雰囲気が違うような、オレに対して嫉妬どころか親切心を持ってくれている感じた。

早歩きで廊下を進みながら中川さんが、

「篠原くんは、これで呼んでほしいとか、そんなあだ名はある？」と訊ねてきた。

「別に。そのままでもいいけど」

「そっか、なら篠原くんのままでもいいね。わたしもね、何でもいいけど、同じクラスに中川っていう女子がもう一人いるから、違う呼び方のほうがわたしもわかりやすいかも」

中川、もう一人いたのか。

「下の名前は？」

「美紀だよ、中川美紀」

美紀、なんて呼んでも大丈夫なわけないよな。

ミキティ……ふざけすぎか。

考え込むオレに、美紀でいいよ、と言う。さすがに遠慮したいと言つと、じゃあ他にいい呼び名があるのかと逆に訊かれた。

「今までなんて呼ばれてたんだ？」

「……普通だよ、美紀ってみんな呼んでた。高校来てからは、中川さんって言われてるけど」

なんだ、今の沈黙は？

理由を問う前に教室に着きそうだったから、それでいいと口を滑らせてしまった。中川さんこと美紀はさらに目を細めていた。

こんな風にしていればいいんだろうか？

今日もオレは日常に支配されて、自分の罪を消し去ろうとしている。いつか忘れるように時間が過ぎていって、新しい出会いで古い

付き合いを隠そうとする。

それは悪いこと。

でも、もう少し夢を見たっていいじゃないか。

弱い人間はそうでないと言っていると生きていけないのだから。

第五話 ぜつぼつと、それから、(前書き)

正樹視点でなければ、タイトルを「。」で終えないようにしました。
ストーリーは進んでいきます。

第五話 ぜつぼつと、それから、

また“彼”に会った。スーパーで陳列された魚を眺めていると、背後から肩を叩かれた。一見親切そうな中年男性のようだが、わたしはこの男がとても親切とは思えない。細める目の奥に何が潜んでいるのか、警戒する。

「やあ、今日も元気がなさそうだね。どうだろう、これから食事でも？」

まるまるとした顔に笑顔を張り付けるこの男が、わたしには気味が悪くて仕方がない。素気なく断り続けると、急に男は声色を落とした。

異様に顔を接近させる男女 中年男性と、ここが地元ではない女子高生という不釣り合いな組み合わせだからか に、買い物をしていた奥様方は遠巻きに訝った。

小さく出された声が放った内容に、わたしは驚愕した。もしこの男の言っていることが本当なら、わたしの宿望が実を結ぶ。この町に来て良かった……。正樹さんと悶着を起こしたときはセンチメンタルになっていて、先のことにはただ不安が募るばかりだったけれど、杞憂だったみたい。

どう？ 話だけは聞く気になったかい？ 男はにかつと笑ってみせた。あまりにも旨すぎる話だけど、この男に騙されてみようか。

もつどうにでもなれ。

はっとなつて、首を横に振った。聞く気になれないのかと言われ、そうじゃないと答えた。

自暴自棄だった。さっきのわたしは。もしかして、心が朽ち果てるのはこういうこと……？

この男から伝えられた心の死は、刻々と終止符に向けて加速して

いる。違う、終止符なんてない、絶望も末もない永遠へと刻む。

ふと陳列棚に目をやる。全ての黒い目玉がわたしを見据えている。吟味するかのようになり、見定めるように、わたしを睨む。ただ天を向いている目玉なんてないように感じられた。どちらが魚で、どちらが買手なのか、まるでわからない。

だけど少しばかりの本能で感じる。わたしは魚。パック詰めされ、生きているのか死んでいるのか、そもそも理解も感情もとうの昔に忘れ去られて、忘れたことも忘れて、時間という買手に食われる魚だと。

男もわたしをのぞき込んだ。気が滅入ってきて、視界が失せそう。心配したような面立ちで、ゆっくり座れる場所に移動しようと提案された。

おぼつかない足取りで入り口へ戻る。奥様方はきつといいように思っていないだろうな。顔は見れないけど、突き刺さる銛もりが視線だと直感する。

陳列棚からも突き刺さる。ひどいものだね、わたしはあなた達と同じなのに。同じ魚なのに。わたしが幸せを願いように、あなた達も海を見ているんじゃないのか？

それとも、母なる海のこと、そこに残してきた仲間すら忘れてしまったの？

いつかこの気持ちも消えてしまう。それはとても辛い。でも、この辛さもいずれ泡沫うたかたとなり消えていくのだろう。

もう一度。

これはわたしだけの問題なのに、何を甘えているんだろうと思う。もうきみは関係ないというのに、まだわたしの中で泳ぐ目的を遂げているように、きみを探している自分がいた。

どうか、どうか、醜い魚の声を聞いてください。

きみは、この広い海のどこにいますか？

もしいるのなら、わたしが泳げる間に、網にかかってしまう前に、

もう一度だけ会ってください。
どうか、どうか……。

わたしは一体どこへ連れていかれたんだろう？

ふとした疑問が冷笑を誘う。悲劇のヒロイン気取りには嫌気が差しただろうに。

「大丈夫かい？ 水でも飲めるかい？ コーヒーか、紅茶か、それとも」

「水でいい」

近くの喫茶店だろうか。クリーム色の薄いカーテンが張られた店内はどこかもの寂しく感じられて、茶色の箱からは頼りないジャズが小さく流れ出ている。それでも音が聞き取れる、というよりもノイズさえはつきりとわかるほどに人の話し声がしない。辺りを見回すと、客は数人しかいなくて、誰もが独り。店が薄暗いのも、そのせいなのかもしれない。

カーテンをめくって窓の外を覗くと、見慣れた町並みが広がっていた。わたしはこの喫茶店を知っている。

「この店知ってるかい？ 『ねこのて』っていう喫茶店。こっちが借りたいくらいだよねえ。実はここのマスター、ちょっと風変わりな人でね。中川というんだが、自分の古くからの友人なんだ」

わたしは、わざとらしく目の前に置かれたコップを掴み、おもむろに水を飲んだ。腕に力が入らなくて、コップを置くはずが、落とすと言っても過言ではないほどに大きな音を立ててしまった。背中に突き刺さったものを無視して、「それで？」と言ってやった。

「おーこわいこわい。可愛らしい顔がもつたいない」

「はぐらかさないで」

「いやはや申し訳ない」

男はさらに目を細める。

「で、何か思うことはないかい？」

素直に言えば疑問が一つだけある。声に出すのもしんどいけど、もったいぶる必要もないから、簡単にまとめて突き出す。

「あなたに旧友なんているわけないじゃない」

「ひどいなあ。でもそうだね。自分に友はいない。必要もない。だから彼はどちらかと言えば“傍観者”なんだ」

「……傍観者？」

「たとえば自分がもどかしい思いを抱えて、彼に飛びつく勢いで語っても、彼は見ているだけだし、何も言わない。少しばかりの嬉しい話を持ち込んでも、彼は決して口を開こうとしない。またある時、断腸の思いで打ち明けても、全く動じもせず、ただ自分を見る。彼はわかっているんだ」

「何を？」

頭の奥で何かが軋んだ。錆び付いた歯車が回るように、少しずつ回り出す。

頭が痛い。キリキリと絞められるのは気持ち悪かった。早く話に区切りをつけたくて、こちらから畳みかけて終わりにしてしまおう。「ろう者でしょ？ そんな憶測にかまつてる暇はないって前も言っただけだよ。それに、あなたの話にはうんざりしてるのかもよ。

根拠もないことを話されたって、誰も信じない。このマスターも同じ。わたしたちが何をしてようが関係ないと思ってる。そうだよ、他人なんだから」

なんでだろう。

最後の一言を放ったら、息が苦しくなってきた。

まあまあ、と男は制する。

「確かにね、自分達はそんな間柄じゃあない。ただ愚痴を聞いてもらうだけの仲だ。でもね、自分は彼が何かを知っているように見えるんだよ。自分達の答えをね」

答え……、とわたしは繰り返していた。

そうだ、わたしは答えを探しに来た。ずっと手がかりを求めさま

よって、やっとこの町にたどり着いて、いろんなものを見て、正樹くんに出会って　　そういえば、わたしが眼を交換してから、誰かと話をして楽しかったのって、正樹くんが初めてだったんだ。

最後の人にもなってしまうけれど……。

今思えば、正樹くんと初めて話したのは神社の鳥居だったわけ。興味本位で初めましてと話しかけたわたしに、不審そうに、でも悲しげに見つめてくる正樹くんの顔が昨日のように思えてくる……。

同情？　そんな単純な感情じゃない。正樹くんは、どこかでわたしと正樹くん自身を重ねているようだった。本人は全くその気がなかっただろうけど、そう感じられた。　　わたしの妄想かもね。自分自身の存在もわからなくなって、放浪しているうちに落としてしまった心の欠片を集めて持ってきてくれた彼が、わたしにとって王子様みたいだった。顔の冴えない　　っていうのは失礼かな。でもお世辞でも美男子とも言えないし　　、そんな人でも、冷たい人でも構わなかった。ただ彼だけは、何か違う“繋がり”を感じた。

だからこれを絶ちたくなかった。正樹くんと仲良くしてる友達と親しくなれたら、少しはわたしに対する正樹くんの恐怖心が拭えるかなって、怖かったけど、その友達に手を振ってみたら、急に怖さが増してきて逃げてしまった。駄目だ、わたしは、わたしに向けてくれた興味の目に恐怖してる。それから正樹くんに頼りたい気持ちが止まらなくなった。

そして今も、完全に忌み嫌われた今でも変わらずに……前にも増してるかもしれないけど、この気持ちはまだ消えていない。「気になるだろう？　自分と、きみの謎が解けるかもしれない。自分分は全てを知っているわけじゃないからね、少しでも真実を知りたいんだよ。それはきみも同じだろう？」

「……そうだね。できれば、どうしてこんなことをしたのか聞きたいくらい」

カラン、と鐘が鳴った。入口の扉に付けられたものらしい。

群青色のリボンを見せ隠し、ウェーブの髪を揺らしながら、よく見かける制服に身を包んだ女の子が現れた。

その後ろから見えた顔に、はっと、息を飲んだ。

それは向こうも同じようで、具合が悪そうに顔を蒼白にさせて固まっている。さらに続く、名前も知らない一人は、相反して目を輝かせているけれど。

「知り合いかい？」

と男が言う。

「……………いいえ」

「とんでもない！」

数歩前に出て、俯く彼の友人は口を達者に動かした。

「ほら、覚えてない？ まれに出会ったよな。きみって逃げ足が速いというか、目くらましが上手いというか！ 何度もしてやられた！ ところできみの名前は？ あ、オレの名前も知らないよな！

高倉平次っていうんだ！ それでこっちが

「言わなくていい」

呟く彼が、小さく見えた。その代り、

「なんでここに？」

質問が突き刺さる。

きみこそ、と悠長に構えてもいられず、わたしも視線を落とした。

「……………とりあえず、何か飲んでいっただら？」

相互を見て、女の子がつかえながら口にする。

しばらくじつと黙って、息を吐きながら、彼は頷いた。頬には赤みが戻り、一定の動きで、小さく深呼吸を繰り返している。

きつと彼は苦しんでいる。

逃れたと思われた災難が、また目の前に姿を現したのだから。

で、わたしに何ができる？ 元凶であるわたしが……………、彼にできること。わたしが完全な臨終を迎えれば全て片付くのだからうけど、せめて罪滅ぼしと思われぬ程度の細やかな恩返しを。

少年、と向かいの男が呼ぶ。

「顔色が悪いね。今日は病気ででも蔓延してるのかい？」

彼の視線の先を辿って行けば誰だっかわかるのに、本当に嫌らしい笑みを浮かべ、こめかみを指で搔く。男は彼の精神を抉ろうと、わざと露骨な表現を用いない特有の言葉を選ぶ。心にどれほどの傷を負わせられるかは、本人と目標ターゲットにしかわからない。わたしにもさっぱりわからないけれど、こめかみを搔く男の癖は、新しい目標を見つけた時にするものだから、確実に彼を壊そうとしているのに気付くことができた。

前に何度か、この男に精神を壊された人達を見たことがある。見るに堪えない姿だった。詳しくなんて言えない。わたしの口では憚られる。

それを思い出して、憤怒の感情を抑え、せめて彼だけは餌食にならないようにしなければと、そう思えてくる。身を捨ててもいい。一瞬でも夢を見させてくれた彼のために、残された心を削ったって構わない。

指から、髪の毛の先から流れてくる熱が、肌を通り中心へと向かって螺旋を描いていく……。体の隅々まで、抜かりなく浸透していく。そして辿り着いた胸で弾けて、より一層の熱量を放った。

なんだ、わたしにもまだ残っているものがあるんだ……。憤怒も。理性も。決意も。感謝も。愛も。そしてそれらが未だに存在することに対する喜びも。抜けかけた熱が戻ろうと、龍のようにうねっている。もし本物の龍なら、心の命が尽きるまで、わたしを守る守護神であってほしい。

「そんなことより本題は？」

「あれ、きみ、乗り気でなかったじゃあないか。どういう風の吹き回しだい？」

男は、おそらく感じた。訝しげに眉をひそめ、こめかみを搔く指を止めた。

気分が良くなっただけと言い、できるだけこちらの思考を読まれないように目を瞑って動きを極力抑えた。

無駄に終わるだろうけれど、意地でも抵抗してやろう。思い通りになつてたまるもんか。

魚だって抵抗するんだから。

篠原正樹という存在が、汚いものに穢《けが》《さ》れないために。渾身の力を振り絞つた一泳ぎを見せてあげる。

第六話 かのじよのほほえみ。

守りたいと願っていた存在が、わたしと対等でいたいと望むなら、わたしもそれに応えよう。

君が謝るなら、わたしも謝ろう。

でも、そんな鏡映しなんかで終わらせたくなくから、一言お礼を言わせてください。

美紀の実家は喫茶店を営んでいる。マスターが祖父で、淹れたてのコーヒーはこの店よりも美味いんだと目を輝かせていた。

店の外観ならよく知っていた。学校からそう遠くないところにある、年期を漂わせる喫茶店。その認識しかなかったけど、
・例の彼女を捜すたびに前を通り過ぎた程度だったけど、コーヒー豆の香ばしい香りがオレの脳内を少なからず癒してくれていたと思う。一方カフェインには興奮作用があるらしく、この相反する効能はどういった仕組みなんだろう、という疑問があったせいで、入店まで頭が回らなかったなんて、言えない。カフェインのせいにしてたら世のコーヒー愛好家が悲しむ。そもそもカフェインを研究しているわけではないのだから、何も気にせず、単純に、もしくは平然を装ってコーヒーをたしなむことだってできるだろうに。オレは昔から疑問を抱いては遠巻きに眺めることしかしない。

この思考も知らず、美紀は祖父について語る。よほど祖父が好きなんだな。

それはともかく、勧誘の凄まじさに驚嘆した。年齢イコール彼女
いない歴、女友達など以ての外であるオレが、調子良く話せるわけ
がない。

「行く？ 行こうよ、絶対美味しいから。じゃあ決まり」
はい決定。

……強制かよ！ せめて考えさせてくれよ！

女の世界は恐ろしいと、高倉の無意識が引き起こした事件の数々
が物語ってきた。しかしながら。今日初めて話した女子に、有無
を言わせぬ世界であったことを教えられてしまった。

清楚なイメージとかけ離れた変わりように、驚きを打ち負かせ、
呆れすら通り越して、言われるがままに連れられた。

これが『ねこのて』に至る経緯だ。何も悪くないはず。思惑は当
然ない。

なのに何故か、喫茶店にいた。

雪肌にはうは、見慣れた制服。流れる黒髪。

緋色の左目も、変わってない。

敢えていうなら、彼女はどこかしら青ざめていた。

それはオレも同じだろうけど……。

いや、彼女がここにすることも意外だけど、行動を共にする存在
がいるなんて思わなかった。彼女の向かいに座るごく普通の中年男
性で、いかにも作った笑みを浮かべている。

好かない顔だ。オレは直感でそう思う。

セールスマンが張り付けた仮面のようで、道化師のようで、信用
に値しない顔とはこれのことか。もしかすると、危ない宗教とか？
彼女に限ってはあり得そうな話だ。

とりあえずこの状況を切り抜けて、
謝らないと。

この男を何かしらして追い払って、
オレのせいだ、って言って、

「ごめん、と。」

今朝はそれだけを考えていただろ、オレは。

「知り合いかい？」

男が彼女に尋ねた。すると、彼女は否定の返事をした。

それに対する高倉は「とんでもない！」と声を張り上げる、のはいい。オレのいないところで、地球外生命体に話して聞かせるという条件であるなら。それほど羞恥をさらけ出す台詞に違いなかった。高倉は念願であった例の彼女との再会を、何して良いのやら、まるでわかっていない。顔見知り否定されたことが心外だったのか、あれやこれやと早口で並べ立て、オレの紹介までしようとした。

「言わなくていい」

説明するのも無駄だ。

彼女はオレを知っていて、

オレは彼女を知らない。

それだけ。

知られたままでいられないのは、こちらが不利に思えたからなのか、それとも、

「なんでここに？」

オレが彼女を知りたいと願っているから？

空漠とした想いを押し量ることもせず、……最低だ。

オレの言葉は、当然ながら彼女にとって憎まれ口だ。

「……とりあえず、何か飲まない？」と美紀が言う。ありがたい。

静かに息を吐く。吸い込んだ空気を肺に送る。この循環を張りつめた神経で感じ取る。彼女の方が苦しいだろうに、何をしているんだ……。

少年、と男が声をかけてきた。オレと高倉のどっちを指したのかわからず、反射的に男を見た。間違いなく、こちらを見ているから、オレを呼んだのだろう。

「顔色が悪いね。今日は病気でも蔓延してるのかい？」とこめかみ

を掻きながら言う。

病氣？ まさか、病人に見られているのか？ ひどい言われようだ。

とにかくこの男、何か妙で、腹の奥を探っているように感じる。オレのことを探って何になるのか検討もつかないのがさらに気持ち悪い。普通、初対面の相手に対して病氣が蔓延云々より、単純に体調を気遣うだけのはず。それに“今日は”と限定されると、今日のうちにオレに似た人と会った、あるいは会っているということとで……、後者だと彼女が絡んでくることになる。

これまで黙っていた彼女は痺れを切らしたかのように『本題』を男に要求する。

これも気になるところだけれど、男の表情が一瞬変わったのを見て、これ以上首を突っ込まない方が現状では得策だと思った。

「コーヒー淹れてもらうから、こっちに座って」

勧められた席は、テーブル席の向かいにあるカウンターだった。そこに面した厨房にマスターらしき人物、つまり美紀の祖父が既にコーヒーを淹れ始めていた。白髪を雀の尻尾にして束ね、丸眼鏡をかけ、地味なカーデイガンが風情を醸しながらも、纏われている身体は健康そうで、背筋をぴんと伸ばしている。湯気が眼鏡を白く染める。淡々と、寡黙に、安閑の時を刻む。

覚えのある香りの発生源を差し出される。軽く会釈をして口に含んだ。

「………美味い」

まごうことなき絶品だった。

高倉からも同じ言葉が漏れた。

「美味い！ 超美味い！ コーヒーなんてあんまり飲んだことないけどさ、これはいける！ オレもう一杯飲みたいわ、篠原奢つてくれ」

「なんでオレが！」

お前の保護者じゃないぞ！

「というか飲み干したのかよ！ 味わえよ！
それよりも火傷しないんだなまったく！」

「金欠なんだ」

「知るか」

「明日返すからさ」

「前に同じこと言ってたよな。返ってきたためしがないし。返せよ」

「友人に金をたかるなんて良くないぞ」

「言ってることとしてることが逆だ！」

「今回は返すって。だから奢って」

「ぼろが出たな！？ 前のも返せよ！ だから奢れって強引にも程
つてもんがあるだろ！」

「やめとけ篠原……」オレの肩に手を添えて「お前が、ど
んどん小さく見えてしまウ。友人として見てられないヨ」

「そつちがやめる。あと棒読みもやめる。オレは物理的にも精神的
にも小さくない」

「言い訳なんて」

「聞きたくないってか!？」

「ぱちぱちぱち

乾いた音にオレ達は反応した。先程の男がニコニコと、手を打っ
ている。場を静めるでもなく、愉快に拍手している。

他の客が眉をひそめているのが見える。

「なかなか良い漫才だ。コンビを結成することを勧めておくよ」

「漫才じゃないですから。あとコンビ組む気もありません」

隣から、ひどいぜ、と聞こえてきたが、無視しておく。

「一期一会」

「は？」

「何が人生の分岐点になるかわからないんだよ、少年」

「なんで知り合って間もないのに説かれなくちゃならないんだ。腹
が立つ。」

傍の彼女も怒っている。だがこの男は気付かない。気付こうとし

ない。

「さて……ここも騒がしくなったことだし、場所を移るとしようか」

男はカウンターに小銭を置き、店を出ていった。閉まりかけた扉の隙間に、白い指が差し込まれた。男は彼女のためにドアを押さえ、ていながった。

隣から大声が発せられる。もう帰るのか行かないでくれ頼むからまた会えるかなというかあの男って誰お父さんか誰か　ずらずらと並ぶ言葉は息継ぎを知らないようだ。

「名前は？」

こぼれた。オレの口から。

「そうそうそれぞれオレが言いたかったのはまさしくそれだ！」
嘘つけ。

「名前……」

彼女は一瞬悩んでいるふりをした。明らかにふりだった。

「そうだ。お前だけオレの名前を知ってるなんて不公平だ」
そうじゃなくて、

言いたいのはそういうことじゃなくて、

オレは何も知らないから、

それってつまり不公平だから、

無知だからこそ、

「対等でいたいんだよ」

知りたいと思う。

「オレ、何もできないけどさ、名前くらい知ってたって、いいんじゃないの？　少しでも対等に近付けるためにさ」

それと、

「あの時は、ごめん」

支離滅裂。恥ずかしい。高倉にどうこう言える立場じゃなかった。きつと困ってるだろうな。怒ってるかもな。名前教えるだの対等でいたいだの、彼女の苦しみを理解すらしていないのに。知らない

くせにでかい口を叩くな、と。

悪いけど、と彼女は言う。

「名前、知らない。覚えてないんだよね。……………ごめん、自分の名前も教えられないなんて」

それから、

「ありがとう」

何故か微笑んでいる。

扉の隙間を広げ、細い体を滑り込ませた。

コーヒーの香りが立ち込める喫茶店に、彼女の残り香が漂う。

おまけにオレの耳に鈴の音を残していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8228r/>

さがしもの。

2011年8月30日03時30分発行